



地域でともに幸せに暮らしたい

～知的・発達障がいの子どもの子育て～

くろだ みえ
黒田 美恵さん（そにっとキャンプ親の会「もりびと」）

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、中止や変更を余儀なくされた本年度の人権保育専門講座ですが、皆様のご理解とご協力のもと、開催することができました。講座1では、そにっとキャンプ親の会「もりびと」の黒田美恵さんに、「地域でともに幸せに暮らしたい～知的・発達障がいの子どもの子育て～」と題して、保護者の立場からの思いやかわりのあり方についてお話いただきました。

黒田さんの母親としての体験談

私は、清太郎が知的障がいを伴う自閉症と診断を受けた時、頭の中が空っぽになり、普段は喋っていた保護者とも話をする気分にはなれませんでした。病院の先生から「できるだけ早く療育を」と言われたのですが、何も考えられませんでした。そのようななか、お姉ちゃんの担任の先生が喋りかけてくれた時、涙が滝のように流れ出しました。

私は子どもの診断の結果を聴き、ショックを受け、時間の経過とともに否認、悲しみ・怒りと感情が移り変わっていきました。私は、はじめの3日間は家のなかでずっと泣いていました。「このままではいけない」「子育ても家事もしなくては」とも思いましたが、すぐに受け入れることができず、悲しみに戻ることもありました。このようなことを繰り返し、やがて「子どものために前を向かなくてはいけない」と思うようになり、子どもの状況に適応し、再起へと心情が変わっていきました。

清太郎と私たち家族は、支援してくれる周りの人々によって支えられてきました。保護者だけで抱え込むことなく、安心でき、「人に頼ってもいいんだ」と思えるようになりました。

黒田さんが行ったこと

家や施設にこもり、外の世界と触れ合わず、ご近所に迷惑をかけないように育てるのではなく、「外に出て、ご近所に迷惑をかけたなら謝り、助けてもらったなら感謝する」という育て方をしよう！

私は、清太郎が4歳の時に「清太郎便り」を用意して、地域の方に配りました。便りの前半に清太郎の特性のことを書き、後半には「子どもの良いところや、地域の方々へお願いしたいこと・感謝の気持ち」を書きました。便りのことを清太郎のお姉ちゃん（当時小学1年生）に話をすると、「私も書く」と言って一緒に書いてくれました。

地域のみなさんには、スイミングスクール、ラジオ体操、地域の幼稚園・学校等、様々な場面、できごとをとおして、困ったところだけでなく、良いところも感じてもらえました。ありのままの子どもの姿を、地域の皆さんに理解してもらえたことで、親子ともに自己肯定感が生まれてきました。また、周囲の人とお互いに良い刺激や影響を与え合うことができました。

☆「困った子」ではなく「困っている子」という視点で見てほしい。

☆子どもの困り感を取り除いていく事で、子どもの可能性が広がる。

☆誰もが地域でともに幸せに暮らすことができますように…。

<参加者アンケートより>

- ・子どもは、自分の困っていることを理解してもらい、支えてもらうことで、こんなに成長できるのだと感じました。年々気になる子どもが多く、若い先生方はどのようにかわっていけばいいか悩んでいます。清太郎さんが家族、周りの愛情に支えられ、おとなへと成長している過程に感動しました。私も職員も、現在悩んでいる子どもや保護者に愛情をもって接していこうと思いました。
- ・印象に残ったのは「外に出て、ご近所に迷惑をかけたなら謝り、助けてもらったなら感謝する」育て方をしていこうと決めて、地域の人にお便りも出されたことです。また「困った子」と見るのではなく「困っている子」とみるということを知り、保育の現場でも視点を変えてその子のことを考えていきたいと思いました。